



Title	「劉因作品」年譜 散文篇その(一)
Author(s)	會澤, 卓司
Citation	琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部(34): 209-224
Issue Date	1989-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2112
Rights	

「劉因作品」年譜 散文篇その（一）

會 澤 卓 司

「劉因作品」年譜 散文篇 その(一)

會澤卓司

今回の作品年譜は、劉因の作品のうちから詩・辞・賦・楽府を除いた文だけを対象とし、その中でも特に製作年次のはっきり確定し得るもの四十七首について編年を行ない、第一次分として発表することにした。

ところで、劉因の作品年譜を作成するにあたって、少しく劉因文集の版本について説明を加えておく必要があるだろう。何故なら、版本の系統によって収録作数や文体の弁別などに若干の異同が見られるからである。

劉因文集に関する筆者の現在までの調査によれば、それは大きく三つの系統に分けられるように思われる。

一つは、元の至順庚午、つまり至順元年(三三〇年)に、福建の建安にあった書肆宗文堂の刊行に係る元刊本の系統である。四部叢刊初編に収められている『静修先生文集』二十二巻は、その影印版である。この系統のものは、詩型、文体別に巻が立てられており、巻之一、五言古詩(冒頭に辞二首を含む)から、巻之十四、七言絶句までが詩、巻之十五は楽府、そして巻之十六、碑から巻之二十二、題、跋までが文となっている。

二つは、明の万曆十六年(一五八八年)、容城知県の方義壯の校訂重刊に係る『容城文靖劉先生文集』四巻で、「三賢集」に収められている。これは、巻一・二が文体別に文を、巻三・四が詩型別に詩(辞・賦・楽府も含む)を収録している。この系統のものとしては、後に、清の光緒十一年(一八六五年)王瀨が、「三賢集」本の訛謬を正して十二巻にまとめた『静修先生文集』があり、現在、畿輔叢書に収められている。これもやはり詩型、文体別に巻立てがなされているが、「三賢集」本とは、文体

の弁別と配列に違いがあり、また楽府は全く収録されていない。

三つは、明の弘治乙丑、つまり弘治十八年(一五〇五年)に慈谿知県の崔嵩が校正重刊した『静修先生文集』三十巻の系統である。この系統のものは、前の二者とは違って、詩型、文体別に全体を巻立てしているのではなく、劉因の作品集の成立順に構成している。すなわち、劉因の自選詩集といわれている「丁亥集」五巻を巻首に置き、次いで彼の門人、故友の編纂に係る「樵庵詞」一巻、「遺文」六巻、「遺詩」六巻、「詩文拾遺」七巻、更に楊俊民の跋録に係る「統集」三巻、賈昇の編纂に係る「附録」(上・下)二巻の合わせて三十巻を白刻したものである。このうち「附録」二巻は、劉因に関する資料を集めたもので、劉因自身の作品そのものではない。

以上、劉因文集の版本について簡単な説明を加えてきたが、三系統それぞれにも種々の版本が存しており、それらの来歴やその関係、また文集成立の事情なども含めて版本については、それだけで検討を加えなければならぬ問題がある。この版本に関する詳細は、稿を改めて論述する予定であるので、いまここでは、これ以上触れない。

さて、前述の版本の三系統のうち、一番目は四部叢刊本を、二番目は畿輔叢書本を、三番目は内閣文庫の三十巻本をテキストとして、この年譜を作成した。いま、それぞれのテキストに従って、作品の収録状況を比べてみると、収録作品数が一番少ないのは、四部叢刊本で九十首、次いで畿輔叢書本が百十首、収録数の一番多いのが内閣文庫本で百十四首

干支	皇帝紀年	西曆	年令	行跡	作品名	備考
壬子 二	理宗 淳祐九	一一二五二	四			
憲宗 一	一一二五二	一一二五二	三	尚書をおぼえ、日に千百もの文字を書き連ね、読んだものはすべて暗記した。		
庚戌 二	一一二五〇	一一二五〇	二			
己酉 一	一一二四九	一一二四九	一	劉因、この年の二月、保定容城に生まれる。父は述、母は陳氏。		
(海迷失)						

となつてゐる。後二者の作品収録数の差は四首のように見えるが、実際は六首である。というのは、畿輔叢書本、卷三、書の項にある「與趙安書」は三題になつてゐるが、内閣文庫本では「統集」卷二、雑著の項に「與趙安之手書」と一題だけである。しかしながら、その内容は畿輔叢書本の三題と重なつており、これを三題と数えると、内閣文庫本は全部で百十六首ということになるからである。この六首の差の内訳は、内閣文庫本「遺文」卷六、序説銘贊雜文の項にある「書王維後」一首と、同「詩文拾遺」卷七、先世雜事記の項にある五首が、畿輔叢書本には収録されてゐないことによる。また四部叢刊本収録の九十首は、他の二者と二十乃至三十六首もの差があり、その内訳を述べると煩瑣になるので、いまは説明を省略する。ただ、この九十首を内閣文庫本のものとは比べてみると、「統集」に収録された作品が、一つも含まれてゐないことが特徴的である。

次に、以下に掲載する表について若干説明を加えておきたい。

- (1) 行跡は、基本的には、蘇天爵の『滋溪文彙』卷八所収の「静修先生劉公墓表」によつたが、必要に応じて『元史』及び『新元史』の劉因伝をも参照した。
- (2) 作品名の欄に記載されている作品題名及び「」内の記事は、内閣文庫本によつた。
- (3) 備考欄には、上欄記載の作品が、内閣文庫本、四部叢刊本、畿輔叢書本、それぞれの何巻何の項に収録されているかを記した。また上欄記載の作品題名及び「」記事と他のテキストとの間に異同があつた場合には、そのテキストの左傍に「」で示した。尚、備考欄記載のテキストは左記の如く略記してある。
 - 内閣文庫本 ↓ (閣)
 - 四部叢刊本 ↓ (四)
 - 畿輔叢書本 ↓ (輔)
 - 元文類 ↓ (類)

癸亥 四	壬戌 三	辛酉 二	庚申 中統一 景定一	世祖 己未 九	戊午 八	丁巳 七	丙辰 六	乙卯 五	甲寅 四	癸丑 三	千支	皇帝紀年
四	三	二	景定一	開慶一	六	五	四	三	二	宝祐一		皇帝紀年
一二六三	一二六二	一二六一	一二六〇	一二五九	一二五八	一二五七	一二五六	一二五五	一二五四	一二五三		
一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五		
					文章を作ることをおぼえる。				六詩を書くことをおぼえる。		行跡	
											作品名	
											備考	

皇帝紀年	千支	至元一	甲子	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰	己巳	庚午	辛未
皇帝紀年	度宗	咸淳一	五	二	三	四	五	六	七	八
	二二六四	一二六五	一二六六	一二六七	一二六八	一二六九	一二七〇	一二七一	一二七二	一二七三
	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五
行跡						才器は、ぬきんでてすぐれており、毎日記録や文書を調べ「希聖解」を作る。				
作品名			○「弔荆軻文」 序文に「歲丙寅十月」とある。		○「希聖解」 本文の最初に「歲丁卯」とある。		○「宣化堂記」 本文末尾に「至元庚午十二月朔、易川劉駟謹記」とある。	○「馴鼠記」 本文末尾に「至元七年十一月三日記」とある。	○「集註陰符經序」 本文末尾に「至元八年四月望日、容城劉某書」とある。	
備考			(閣) 「拾遺」卷四、雜著。 (輔) 卷五、序。		(閣) 「拾遺」卷四、雜著。 (輔) 卷一、雜著。		(閣) 「拾遺」卷六、記序哀詞贊疏題跋。 (輔) 卷一、記。	(閣) 「遺文」卷四、記。 (四) 卷十八、記。 (輔) 卷一、記。	(閣) 「遺文」卷五、序說。 (四) 卷十九、序。 「趙徵士集註陰符經序」 (輔) 卷一、序 「陰符經集註序」	

皇帝紀年 千支	皇帝紀年	行跡	作品名	備考
一〇 癸酉	九 八		○「檜著記」 本文末尾に「至元十年春二月吉日、檜成記」とある。	(閣) 「遺文」卷一、雜著。 (四) 卷十八、記。 (輔) 卷一、雜著。 (類) 卷二十八、記。
九 壬申	八 二二七二 二二四		○「輞川圖記」 本文中に「癸酉春、予得觀之」とあり、末尾に「三月望日記」とある。	(閣) 「遺文」卷四、記。 (四) 卷十八、記。 (輔) 卷二、記。
一一 甲戌	一〇 宗 二二七四 二二六		○「田景延寫真詩序」 本文末尾に「至元十二年三月望日、容城劉某書」とある。	(閣) 「拾遺」卷六、記序及詞贊疏題跋。 (四) 卷十九、序。 (輔) 卷二、序。
一二 乙亥	一一 德祐 二二七五 二二七		○「書東坡傳神記後」 本文末尾に「至元十二年三月望日書」とある。	(閣) 「遺文」卷六、序說銘贊雜文。 (輔) 卷三、書後題跋。
一三 丙子	端 宗 二二七六 二二八		○「太極圖後記」 本文末尾に「至元丙子八月望日、静修新齋記」とある。	(閣) 「遺文」卷一、雜著。 (四) 卷二十二、題跋。 「書太極圖後」 (輔) 卷一、雜著。 (類) 卷三十八、題跋。 「記太極圖後」

一四 丁丑	皇帝紀年	千支
二二二七七二九	皇帝紀年	
二二二七七二九		
		行跡
<p>○「跋魯公祭季明姪文眞蹟後」 本文末尾に「至元丁丑八月癸亥日、容城劉某書」とある。</p> <p>○「跋朱文公傑然直方二帖眞蹟後」 本文末尾に「至元丁丑八月壬戌日書」とある。</p>	<p>○「篆隸偏旁正譌序」 本文末尾に「至元丙子八月既望序」とある。</p> <p>○「徐生哀挽序」 本文の最初に「至元十二年秋九月」とあり、末尾に「明年正月既望、容城劉某序」とある。</p> <p>○「退齋記」 本文末尾に「至元丙子八月既望、容城劉某記」とある。</p>	作品名
<p>(閣) 「拾遺」卷六、記序哀詞贊 疏題跋</p> <p>(四) 卷二十一、題跋。</p> <p>(輔) 卷三、書後題跋。</p> <p>(閣) 「拾遺」卷八、記序哀詞贊 疏題跋</p> <p>(四) 卷二十二、題跋。</p> <p>(輔) 卷三、書後題跋。</p> <p>(閣) 「遺文」卷六、序說銘贊 雜文</p> <p>(四) 卷二十二、題跋。</p> <p>(輔) 卷三、書後題跋。</p>	<p>(閣) 「遺文」卷五、序說。</p> <p>(四) 卷十九、序。</p> <p>(輔) 卷一、序。</p> <p>(閣) 「遺文」卷五、序說。</p> <p>(四) 卷十九、序。</p> <p>(輔) 卷一、序。</p> <p>(閣) 「遺文」卷四、記。</p> <p>(四) 卷十八、記。</p> <p>(輔) 卷一、記。</p> <p>(類) 卷二十八、記。</p>	備考

皇帝紀年 干支	皇帝紀年		行 跡	作 品 名	備 考
	一五帝 戊寅 祥興一	昂 一二七八 三〇		<p>○「跋懷素藏真律公二帖墨本後」 本文末尾に「至元丁丑七月己亥書」とある。</p> <p>○「書王子端草書後」 本文末尾に「至元十五年正月二十三日書」とある。</p> <p>○「浴水李君墓表」 文中に「一十五年春、純一遣使持君世次行事、請於予曰…」とある。</p> <p>○「玉田楊先生哀辭<small>并序</small>」 序文に「至元丙子（一二七六）」とあり、更に「又二年、遇諱予曰…」とある。</p>	<p>〔閣〕「遺文」卷四、記。 〔四〕卷十八、記。 〔輔〕卷二、記。</p> <p>〔閣〕「遺文」卷六、序說銘 贊雜文。 〔四〕卷二十二、題跋。 〔輔〕卷三、書後題跋。 〔類〕卷三十八、題跋。</p> <p>〔閣〕「遺文」卷六、序說銘 贊雜文。 〔四〕卷二十二、題跋。 〔輔〕卷三、書後題跋。</p> <p>〔閣〕「遺文」卷三、碑銘表誌。 〔四〕卷十七、墓表。 〔二十五〕「二十五年春…」 〔二十五〕「二十五年春…」</p> <p>〔閣〕「拾遺」卷六、記序哀 詞贊疏題跋。 〔四〕卷二十、哀辭。 〔輔〕卷四、碑銘誌表。</p>

皇帝紀年 干支	皇帝紀年			行 跡	作 品 名	備 考
一六 己卯	二二二七九 三二	(南未滅ぶ)	○「王景勉名字説」	本文末尾に「至元己卯二月癸未、容城劉某書」とある。	(閣) 「遺文」卷六、序説銘 替雜文。	
一七 庚辰	二二八〇 三二		○「武遂楊翁遺事」	本文末尾に「至元十六年正月十六日、書於吟風亭」とある。	(閣) 「拾遺」卷四、雜著。	
一八 辛巳	二二八一 三三		○「己卯春釋菜先聖文」	題に「己卯春」とある。	(閣) 「遺文」卷一、雜著。	
			○「靜華君張氏墨竹詩序」	本文末尾に「至元辛巳二月既望、容城劉某序」とある。	(閣) 「遺文」卷五、序説。	
			○「高林重修孔子廟記」	文中に「迄今至元庚辰(二二八〇)」とあり、文末に「又明年秋九月晦日、容城劉某記」とある。	(閣) 「遺文」卷四、記。	
					(四) 卷十九、序。	
					(輔) 卷二、序。	
					(四) 卷十八、記。	
					(輔) 卷二、記。	

皇帝紀年 千支	一九 壬午	二〇 癸未	二一 甲申	二二 乙酉
皇帝紀年				
	一二八二三四	一二八三三五	一二八四三六	一二八五三七
行 跡	承徳郎、右贊善大夫に拔擢される。ほどなくして、母の病のため、官を辞して帰る。	母楊氏亡くなる。		
作 品 名	○「易州太守郭君墓誌銘」 文中に「甲寅（一二五四）三月十日卒」とあり、更に「後三十年、謙泣涕来請曰…」とある。	○「郭夫人張氏墓誌銘」 文中に「以至元廿一年五月廿三日以疾卒」とあり、更に「謙以狀如右請銘…」とある。	○「祭王彦才文」 本文末尾に「甲申十一月」とある。	○「武強尉孫君墓銘」 本文の最初に「戊申（一二四八）夏六月」とあり、文中に「後三十有八年、繼賢始、狀其爵里、且誦所遺言、請予銘…」とある。
備 考	(閣) 「遺文」巻三、碑銘表誌。 (四) 巻十七、墓銘。 (輔) 巻四、碑銘誌表。	(閣) 「遺文」巻三、碑銘表誌。 (四) 巻十七、墓銘。 (輔) 巻四、碑銘誌表。	(閣) 「遺文」巻六、序説銘贊雜文。 (四) 巻二十、祭文。 「祭參知政事王彦才文」 (輔) 巻五、祭弔文。	(閣) 「遺文」巻二、碑銘表誌。 (四) 巻十七、墓銘。 (輔) 巻四、碑銘誌表。

皇帝紀年 干支	皇帝紀年		行 跡	作 品 名	備 考
二二三 丙戌		二二八六 三三八		○「歸雲庵記」 文中に「至元丙戌、用之女夫鄧淵……」とあり、末尾に「是年三月望日、容城劉某記」とある。	(閣) 「拾遺」卷六、記序 哀詞贊疏題跋。 (四) 卷十八、記。 (輔) 卷一、記。
二二四 丁亥		二二八七 三三九		○「請趙提學疏」 <small>（卷五）</small> 題注に「丁亥正月」とある。	(閣) 「拾遺」卷六、記序哀 詞贊疏題跋。 (輔) 卷三、疏。
二二五 戊子		二二八八 四〇		○「中祀釋奠儀序」 本文末尾に「至元戊子八月望日、劉某序」とある。 ○「廉公惠更名序」 本文末尾に「至元戊子十月既望、容城劉某序」とある。	(閣) 「遺文」卷五、序説。 (四) 卷十九、序。 (輔) 卷二、序。 (閣) 「遺文」卷六、序説銘 贊雜文。 (四) 卷十九、序。 (輔) 卷一、序。
二二六 己丑		二二八九 四一		○「嘉氏子字説」 本文末尾に「至元己丑冬至日、牧溪翁書」とある。	(閣) 「遺文」卷六、序説銘 贊雜文。 (四) 卷二十、説。 (輔) 卷一、説。

皇帝紀年 干支	皇帝紀年		行跡	作品名	備考
二七 庚寅		一一九〇	子供を亡くしてから、おこり病にかかると、秋には治る。	○「祭王利夫文」 文末注に「庚寅四月」とある。	〔閣〕「遺文」卷六、序説銘 賛雜文。 〔四〕卷二十、祭文。 〔輔〕卷五、祭弔文。
二八 辛卯		一一九一	五月二十八日、おこり病が再発。八月、容城にある祖先の墓の側に仮小屋をつくらせる。	○「祭張御史文」 文末注に「辛卯八月」とある。	〔閣〕「遺文」卷六、序説銘 賛雜文。 〔四〕卷二十、祭文。 〔輔〕卷五、祭弔文。
		四三	二十一日、集賢学士、嘉議大夫として召されたが、病気を理由に断る。	○「古里氏名字序」 本文末尾に「至元庚寅重九日、牧溪翁序」とある。 ○「以中李公名字説」 本文末尾に「至元庚寅二月吉日」とある。	〔閣〕「遺文」卷六、序説銘 賛雜文。 〔四〕卷二十、説。 〔輔〕卷一、説。 〔閣〕「遺文」卷六、序説銘 賛雜文。 〔四〕卷十九、序。 〔輔〕卷二、序。

千支	皇帝紀年	皇帝紀年	行跡	作品名	備考
二九 壬辰			<p>国子助教の呉明、書を朝廷にたてまつって、劉因を国子祭酒にすすめる。</p>	<p>○「遊高氏園記」 本文末尾に「至元辛卯四月望日記」とある。</p> <p>○「與政府書」 文中に「某生四十三年」とある。</p> <p>○「遂初亭説」 本文末尾に「至元壬辰重九日、劉某書」とある。</p> <p>○「種徳亭記」 本文末尾に「至元壬辰八月望日、容城劉某記」とある。</p> <p>○「鶴菴記」 本文末尾に「至元壬辰冬十月望日、劉某記」とある。</p> <p>○「正義大夫禮部尚書王公神道碑銘」</p>	<p>(園) 「遺文」卷五、序説。 (四) 卷二十、説。 (輔) 卷一、説。</p> <p>(園) 「遺文」卷四、記。 (四) 卷十八、記。 (輔) 卷二、記。</p> <p>(園) 「遺文」卷四、記。 (四) 卷十八、記。 (輔) 卷二、記。</p> <p>(類) 卷二十八、記。</p> <p>(園) 「遺文」卷二、碑銘。</p>

注
① 現在、筆者が目撃し得た版本は、以下の表の如く九種類である。

静修先生文集 30卷 (静嘉堂文庫蔵)	静修先生文集 30卷 (内閣文庫蔵)	題 卷 所	名 数 蔵
丁亥集 5卷 樵庵詩 1卷 遺文 6卷 遺詩 6卷 拾遺 7卷 統集 3卷 附録 2卷	丁亥集 5卷 樵庵詩 1卷 遺文 6卷 遺詩 6卷 拾遺 7卷 統集 3卷 附録 2卷	構 成	
• 至正九年九月 十一日牒		元	
• 永樂二十一年 (1423年) 陳立可序 • 成化己亥序 (1479年) • 弘治乙丑 (1505年) 王宗 _忠 序 • 弘治辛酉 (1501年) 周旋序 〈卷末〉 • 弘治乙丑 (1505年) 崔嵩跋 〈卷末〉	• 弘治乙丑 (1505年) 王宗 _忠 序 • 弘治辛酉 (1501年) 周旋序 〈卷末〉 • 弘治乙丑 (1505年) 崔嵩跋 〈卷末〉	序・跋等 明	
		清	

皇帝紀年	千支	行 跡	作 品 名	備 考
三〇	癸巳			
二九三				
四五				
夏四月十六日、容城におい て、生涯を終える。			本文中に「明年薨」とあり、更に「其孤鵬持集賢直 學士趙孟頫所選行狀來請：」とある。 ○「賜杖詩序」 本文の最初に「至元二十九年春」とあり、文末に「明 年二月望日、劉某謹序」とある。	(四) 卷十六、碑。 「大元故正議大夫禮部 尚書王公神道碑銘」 (輔) 卷四、碑銘誌表。 (閣) 「遺文」卷五、序説。 (四) 卷十九、序。 (輔) 卷二、序。

静修先生文集 22卷 (四庫全書刊初編撰部)	静修先生文集 24卷 抄本 (静嘉堂文庫蔵)	静修集 24卷 抄本 (内閣文庫蔵)	劉静修文集 24卷 (内閣文庫蔵)	静修先生文集 30卷 (宮内庁書陵部蔵)	題名 卷数 所蔵
	22卷 補遺上下2卷	遺文 6卷 遺詩 6卷 詩文拾遺 7卷 統集 3卷 附録 2卷	遺詩 6卷 遺文 6卷 詩文拾遺 7卷 統集 3卷 附録 2卷	丁亥集 5卷 樵庵詞 1卷 遺文 6卷 遺詩 6卷 拾遺 7卷 統集 3卷 附録 2卷	構成
・李謙序	・李謙序			・至正九年九月十一日牒	元
		・弘治辛酉 (1501年) 周旋序 ・弘治乙丑 (1505年) 崔嵩跋 嘉靖十六年 (1537年) 汪堅重修 <卷末>	・弘治辛酉 (1501年) 周旋序 <卷末> ・弘治乙丑 (1505年) 崔嵩跋 嘉靖十六年 (1537年) 汪堅重修 <卷末>	・永樂二十一年 (1423年) 陳立可序 ・成化己亥 (1479年) 序 ・弘治辛酉 (1501年) 周旋序 <卷末> ・弘治乙丑 (1505年) 崔嵩跋 嘉靖十六年 (1537年) 汪堅重修 <卷末>	明 序・跋等
					清

容城文靖劉先生文集4卷 (三賢集 東方文化学院 京都研究所)	静修先生文集12卷 (畿輔叢書初編集 部東方文化学院 京都研究所)	題名 卷数 所蔵	構成		元		序・跋等		清
					・至正九年九月十一日牒		・邵寶序		
							・邵寶序 ・崔銑序 ・萬曆十六年戊子 (1588年) 方義壯序		
							・光緒十一年乙酉 (1885年) 王瀾跋 <卷末>		

② 『元史』卷二百七十一、列傳第五十八。「新元史」卷二百七十、列傳第六十七。尚、劉因は四十五年という比較的短い生涯のうち、ほとんど官界に出ることもなく、大方は郷里で過ごした人物であるだけに、手がかりになるような事柄が見出しにくいという難しさがある。しかし、それはともかくとして、この表の行跡欄の内容では、未だ不十分なので、漸次充実させていくつもりである。

③ 蘇天爵の編纂した『元文類』には、劉因の文十九首が収録されている。蘇天爵は、劉因の亡くなった翌年二二九四年に生まれ一三五三年に死んでいるので、劉因の生涯と重なることは無かったが、若い頃劉因門下の安熙に従って、劉因の朱子学を学んでいる。

④ この項、『元史』の伝では、劉因七才の時のことになっている。

⑤ この項、『滋溪文藻』では、「弔刑軻文」も作ったとあるが、本文序文に歳が明記されているので、いまこれに従う。前欄作品名の項を参照。

⑥ この作品の制作年が、テキストによって十年もの差があつて問題であるが、いま決め手を持たないので、漸らくは、内閣文庫本に従っておく。

⑦ この作品と、至元二十七年の項にある「祭王利夫文」、及び同二十八年の項にある「祭

張御史」の三つの作品は、四部叢刊本と他二本とは、記載に違いがある。例えば、「祭王彦才文」についてみると、四部叢刊本では
維至元二十一年、歲次甲申、十一月乙亥朔、越二十日甲午、容城劉某、謹以菴米之糗、告于故參知政事王公之靈。
という上合いに始まっているが、他の二本は、右文の傍点の部分「故參知政事王公之靈」から始まっており、それ以前の文は欠落している。そのかわり文末に「甲申十一月」と歳次を注記してある。後の二作品についても、ほぼ同様のことが言える。恐らくは、祭文の定型に合致している四部叢刊本の方が、正しいのではないかと思う。